

おかやまのちょっといい話

シリーズ 31

デニムと赤い糸

子どもに家のお手伝いをどこまでさせるか、と悩む親御さんが意外と多いことを知りました。我が家はお手伝いうんぬんよりも、子どもが興味を持っていたがることは何でもさせたように思います。楽しければ自発的に続けるので、私は何でも楽しむように努めました。また「ダメ」という否定する言葉や「しなさい」のような命令表現も使いませんでした。

3歳ぐらいから私がキッチンにいと、イスを運んできて上に立ち、「何かお手伝いをしようか」と聞いてくるのが常でした。

来客時に「コーヒー豆を挽いていると、ミルをぐるぐる回す様子が娘には面白く映ったのか、「したーい」と寄ってきたので代わりに、「いい、コーヒーメーカーでドリップしてお客様に出すまで、ずっと横で見えていました。」



後日、同じ方が来られた時には娘が「私がコーヒーをいれる」とキッチンへ。程なくしてお盆を手に客間に戻り、「ミルクたくさんとお砂糖は少し入れました」と言ってお客様の前へカップを置いてくれました。前回のやりとりでお客様の好みを覚えていたようです。お客様からは「子ちゃんのいれるコーヒーは美味しいわ」とほめられ、いつにもまして「機嫌な様子でした。」

お客様が帰ることを伝えると「ちよっとお待ちください」と、しばらくして娘が再登場。「美味しいと言われたので、家で飲んでください」と、自分でひいた「コーヒー」を袋に入れて、お客様に手渡しました。当時5歳の娘の心配りに感心したことを覚えています。

娘は裁縫にも興味津々でした。私が入った裾上げをしていると「したーい」といつもの調子。私は何

かをしたかった時は、まずルールを何度も復唱してから挑戦させていました。

針仕事では、針は使った分だけでなく、針山に刺している数も確認するように言い聞かせて始めました。針糸通し、波縫い、糸の止め方を説明し、私の横で思うままに縫っていました。

ある日、洗濯物を片づけていると、娘のデニムに赤いステッチがあるのに気づきました。裏返すと、膝に開いた穴を、赤い糸で埋めようと言ったのがわかりました。娘に「ズボン、上手に縫えたわね。針はちゃんと数えた？」と聞くと「大丈夫よ、ちゃんと数えたから。上手にできたでしょう」と満足げな表情でした。

デニムの穴を埋める時に、赤い糸を使ったことが気になり、それを指摘すべきが、娘の感性をつぶすことにならないかと悩んだ末、赤い糸にした理由を尋ねたところ、「針に付いていたのをそのまま使ったから」とのこと。娘にしてみれば、自分で破れを縫いつけることが重要だったでしょう。

親の欲目に他なりません、家事はひと通りできるように育ててくれたと思っています。第一子でもあり、子育てすべてが試行錯誤でした。それでも幼稚園の年長さんの保護者面談で、担任の先生から「頭をよく使っていることがわかります」と言われて、うれしかったのを覚えています。社会人になった今では、親を気にかうまでに成長してくれています。



あなたのアーバンホール

アーバンホール

葬儀・法要・ギフト

日々是好日 来る日も来る日も楽しく良い日が続きます様に毎日を大切に生きていきましょう。